50th GALAXY AWARD

ギャラクシー賞贈賞式

50回を迎えたギャラクシー賞。50周年記念式典に
引き続いて開催された贈賞式に参列したのは約800名。
各賞の発表と贈賞が華やかに行われた。

［テレビ部門］

●テレビ部門・大賞

「NHKスペシャル シリーズ東日本大震災 追跡 復興予算19兆円」が大賞に輝いた。（写真左から）仙台放送局報道番組チーフ・プロデューサーの高山仁さん、制作統括の熊田安信さん、キャスターの鎌田靖さん、取材した戸田有紀さんが登壇。別の番組で登壇していた先輩の池上彰さんからも「よかったな！」と祝福を受けた。池上さんは「この番組に大賞をと思っていた」と語り、高山さんは「これからも調査報道を頑張りたい」と述べた。

●テレビ部門・特別賞

昨年30周年を迎えたテレビ朝日の「タモリ倶楽部」。演出を担当するハウフルスの山田謙司さん（左）は「肩の力を抜いてやっています。アナログな番組作りは30年前とほとんど変わっていない。そのへんがいいのかも。自由な遊び場になってますね。このまま同じ感じでやっていくと思います」と番組らしいコメント。右はエグゼクティブプロデューサーの山本隆夫さん。「ゴールデンに行くことも、派手なスペシャルもなるべく避けて、淡々と続けていければ」。

琉球朝日放送「標的の村～国に訴えられた東村・高江の住民たち」を制作した三上智恵さんは、「ヘリパット建設に反対したら国に訴えられるという、あり得ないことが起きている。これからも報道を頑張りたい」と語った。

宮城県女川町で撮影されたNHKの特集ドラマ「ラジオ」。「傷あとの深い街の中で、全員一丸となって、可能な限り被災地に生きる人々の気持ちを想像して作った」とテレビマンユニオンの岸善幸さん。

●テレビ部門・優秀賞

テレビ東京「池上彰の総選挙ライブ」の池上彰さんは、7月21日の参議院選挙でも特番を担当する。「大変なプレッシャーです。あれ以上のことができるのか、スタッフとさらに検討していきます」。

［ラジオ部門］

●ラジオ部門・大賞

8月6日に放送された中国放送のワイド番組「日々感謝。ヒビカン」。ラジオ制作部長の増井威司さんは「思いもよらない受賞」と声をふるわせ、こう続けた。「僕たちに何ができるのか。今、世の中で何が起きているのかをつきつめた。平和祈念公園の銅像に原子力エネルギーの公式が書いてあるのを見つけて、これが広島、長崎、福島、チェルノブイリの発端だろうとテーマに決めた」。

●ラジオ部門・特別賞

TBSラジオ&コミュニケーションズ「小沢昭一さん追悼特別番組～あしたのこころだ…小沢昭一について考える」の構成・演出を手がけた坂本正勝さんは、「シャイな小沢さんも天国で喜んでくれていると思う」。

●ラジオ部門・優秀賞

琉球放送「40才のタンカーユーエー」は、復帰直後の沖縄を音声と音楽で感じさせるラジオドラマ。歴史と今を伝えた。「復帰世代の本音がきちんと詰め込めた」とディレクターの宮國宏美さん。

地道な取材が光った毎日放送「原発作業員が語る2年」。ラジオ局編成センター副部長の森崎俊雄さんは「テレビではなかなか話してくれないところを、いかにラジオで伝えるかを考えている」。

日本の戦後史をあぶり出すNHKのオーディオドラマ「橋爪功ひとり芝居　おとこのはなし」は、ディレクターの江澤俊彦さんが大阪城公園で出会ったホームレスの人たちとの会話から生まれた。

●ラジオ部門・DJパーソナリティ賞

真っ赤なトロフィーを嬉しそうに掲げて見せたピーター・バラカンさん。DJ歴は30年以上になる。「普段着の音楽番組が賞の対象になったことが、ものすごく嬉しい。これからのラジオは、いい音楽を提供しながら、どう利益につなげていくかがいちばん大きな課題かもしれない。ラジオは出会いの場。いい出会いの機会を作り続ければ、ラジオはまだまだ健闘できる媒体だと思う」と語った。

●テレビ部門・個人賞

「リーガル・ハイ」や「大奥」に出演した堺雅人さんが颯爽と登場。「ドキュメンタリー、バラエティ、ラジオと、いろいろな分野の方々と一緒にこの場に立てることを嬉しく思っています。フィクションでしか語れない言葉、ドラマでしか伝えられない情報がきっとどこかにあると信じて、現場のみんなとまた新しい作品を作っていきたい」とにこやかに語り、カメラのフラッシュを浴びた。「誰に喜びを伝えますか」と司会の赤坂泰彦さんに聞かれ、「現場の皆さん」と。

［マイベストTV賞］

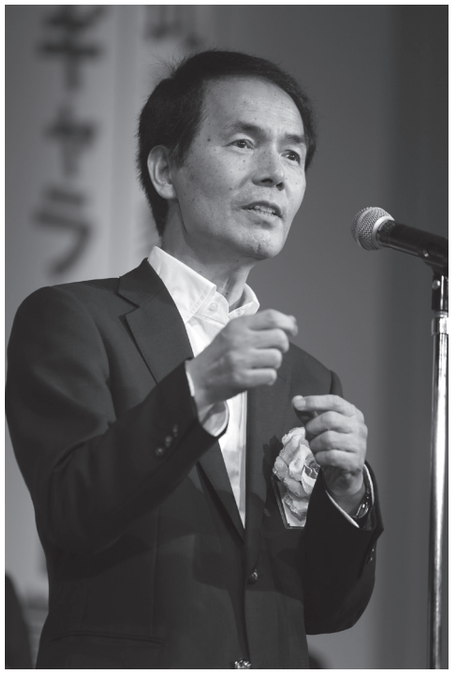
視聴者の投票によって選ばれるマイベストTV賞グランプリは、フジテレビ「鍵のかかった部屋」に決まった。大野智、戸田恵梨香、佐藤浩市らが出演したミステリードラマ。フジの月曜夜9時枠にミステリーが放送されるのは珍しい。司会の水野晶子さんからマイクを向けられると、プロデューサーの小原一隆さんは「マニアックな企画だったので、月9を想定していなかった。上司と会社に感謝したい」と受賞の喜びを語った。

投票に参加した視聴者の横室浩樹さん（左）から、トロフィーが贈られた。

［志賀信夫賞］

藤田さんが企画したマスターズの中継で、解説を担当したプロゴルファーの中嶋常幸さん。

放送界の仕掛け人、ビデオプロモーションの藤田潔名誉会長。「黒子の仕事を長くしてきたので、嬉しくて恥ずかしい気分。番組は視聴率も大切ですが、視聴質が最も大切。もっともっと仕事をしたい」と80代とは思えない若々しい笑顔で語った。中嶋常幸さんがお祝いに駆け付けると抱き合って喜び、解説を頼みに行ったときのエピソードを「中嶋さんは奥さんに弱い」と披露して会場を沸かせた。



1958年に創刊し、放送文化を高める役割を担ってきた雑誌『調査情報』（TBSメディア総合研究所）。書き手の一人だったノンフィクション作家の沢木耕太郎さんが愛情あふれる祝辞を贈った。「活力を失ったTBSが『調査情報』を存続させているのは奇跡的なこと。この雑誌は豊かさと無駄の象徴。重役の間では受賞を花道にやめようという話が出ていると思うが、ぜひ存続させてほしい」。

TBSテレビ新田良一取締役（左）と、「これからも地道に」と語る市川哲夫編集長。

［CM部門］

●CM部門・大賞

280本の中から選ばれた、本田技研工業「負けるもんか（プロダクト）篇」。歴代のホンダの名車が登場し、元気だった頃の日本を思い出させる。電通ビジネス・クリエーション局コミュニケーションプランナーの小野総一さんは、「“負けるもんか”は本田宗一郎さんの言葉。日本の成長を支え、原動力となってきた言葉を、今の時代の方と共有できるCMに携われたことが嬉しい」と語った。

●CM部門・優秀賞

赤城乳業「BLACKシリーズ」。怪しいキャラクターのセリフ「このCMで売り上げのびたらおかしいよね」にかけて、「このCMで賞もらったらおかしいよね、という感じです」と喜びを表した常務取締役の井上創太さん。

東海テレビ放送の公共キャンペーン「交通事故で、死なない。死なせない。」は静かに強いメッセージを伝える。「取材を受けた方が、『いろんな方に伝えてくれて嬉しい』と喜んでくれたCM」と、報道スポーツ局報道部の土方宏史さん。

［報道活動部門］

●報道活動部門・大賞

太平洋核実験被害の真実を伝える南海放送の報道活動。ビキニ水爆実験の被曝被害と政治決着の実態を9年間にわたって掘り起こし、映画「放射線を浴びたX年後」を製作。自主上映の輪を広げた。テレビ局制作部マネージャーの伊東英朗さんは「この賞を、何も知らずに亡くなっていった多くの被曝者の人たちに届けたい。事件が記憶から消えている。事件を伝え、解明することで、今の福島を見ないといけないと思う」と熱く語った。

●報道活動部門・優秀賞

OTVスーパーニュースのシリーズ企画「復帰を知る」は、復帰を知らない世代が取材。「戦後27年間の異民族統治について学ぶ機会はなかなかない」と、沖縄テレビ放送の佐久本浩志アナウンサー。

南相馬市小高地区の農地復旧についての福島放送の報道。鎌田侑樹記者は「南相馬市は私の故郷でもある。故郷を取り戻そうと頑張っている方が、今日も活動されていることを知ってほしい」。